

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	荻田 みどり (おぎた みどり)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第 1084 号
○授与年月日	2016 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	『源氏物語』の「食」の連環
○審査委員	(主査) 中本 大 (立命館大学文学部教授) 中西 健治 (立命館大学文学部特別任用教授) 川崎 佐知子 (立命館大学文学部准教授)

<論文の内容の要旨>

本論文は、『源氏物語』に描かれる「食」に注目し、その本文を詳細に分析することにより、物語を多面的に読解することを目的としたものである。『源氏物語』における「食」の描写は、「衣」や「住」の描写に比べて記述が限定的ながら、主要な事件や重要な人間関係の近くに点在している。それを踏まえ、抽象描写、間接描写、「不食」表現など、「食」に関するさまざまな表現を考察することで、「食」描写が物語理解の糸口となることを明らかにしていく。

本論は二部構成であり、緒論となる序章では全二部各章を概観し、『源氏物語』に至る記紀以降の散文作品から『源氏物語』以後の平安後期物語に至るまで、「食」描写の文学史的特色を述べる。すなわち、物語における「食」は、「晴」と「褻」の性質に分かれること、晴儀の「食」は共同体への帰属意識を高めるため華々しく描かれるのに対し、褻の「食」は穢れを意識していることを確認する。その上で、褻の場における「食」描写の意図を考察することが、物語を把握する上で不可欠であることを提起している。

第一部第一章では、『源氏物語』において作中人物は、常に語り手を含めた周囲の人物からの視線が注がれていること、それが登場人物の行動や心情に影響を及ぼすことを踏まえ、登場人物の視線を追跡することで、共同体への帰属意識及び穢れ意識という「食」の両義性が浮き彫りにされることを指摘した上で、藤壺宮の臨終場面で、「柑子などをだに触れさせたまはず」と、その容態が語られることに注目、これと酷似する表現が、重態の柏木を描く際にも見られることの意義を考察し、類似の記述を繰り返すことで、藤壺宮と同じく柏木が、密通の罪に苦しみながら死んでゆくことを、端的に提示していることを指摘する。

続く第二章では、『源氏物語』中で「不食」描写が最も多い女三宮を取り上げる。その懐妊や周囲の目を気にする光源氏の行動に注目し、出産後の女三宮は、「不食」によって死を意識させながらも、自身は死ではなく出家を希求していることから、死と出家には表現上の相違点が見出せること、更に若君を守る母としての女三宮の成長が窺えることを考察する。

第三章では、光源氏が、紫上と女三宮、二人の「不食」の様子を見つめることの意義を検討すべく、「若菜下」の紫上発病から「柏木」の女三宮出家まで、紫の上と女三宮は対照的に描かれていること、その中で、食描写を通して、光源氏が紫の上と心を通わせようとする一方、女三の宮から心理的に離れていく様子が描かれていることを指摘する。その上で、二人を見つめる源氏に注がれる周囲からの視線によって、源氏の行動が制御されていくことを指摘している。

第四章では、宇治の中君の食欲不振の様子が、その妊娠初期に三度繰り返し描写されていることを取り上げ、匂宮の六君との結婚に伴い中君の心情が揺れ動くなか、周囲の女房や懐妊に気付かない匂宮が、「不食」の中君を「見苦し」と評することに注目し、その意味を考察する。その上で、中君が周囲から孤立し、匂宮の心情との齟齬が大きくなっていく過程を考察している。

第五章では、浮舟の母・中将君が、匂宮の食事風景を垣間見る場面の意味を分析する。垣間見る行為は、観察者の価値観を浮かび上がらせる一方、高貴な匂宮を垣間見たことで中将君の価値観が変容し、浮舟を薫と契らせたい、という理想を抱き始める契機となったことを指摘している。

続く第二部との間には「付章」が置かれている。ここでは「食」に限らず、物語の作中人物が常に周囲の人物の行動を意識し続けていること、周囲の視線に晒されながら物語が展開していることを示す端的な事例を提示している。

付章一では、作中の「騒ぐ」の用例を分析し、「騒ぐ」とは高貴な都人の価値観とは異なる動作であることを指摘し、体面を守るため周囲の視線を避ける中心人物は、騒がしさによって行動が抑制される一方、その合間を縫って行動すること、また騒がしさと主要人物が対比的に描かれることで、冷静さを保つ主要人物の心情を強調することが可能となることを立証している。

続く付章二では、「騒ぐ」と類似する「ののしる」の用法を比較分析し、動作を示す「騒ぐ」に対し、「ののしる」は音声表現に即していること、「ののしる」という表現は、対象となる人物に向けられると同時に、周囲の人物へも広がる性質を持つこと、また「ののしる」は影響を及ぼす範囲が限定的であり、その視覚的・聴覚的領域の内外によって、心情の差異が生まれることを指摘している。

第二部では、人が交流するなかで、「食」が互いの心情を動かす契機として効果的に用いられている事例を取り上げ、検討している。第一章では、「薄雲」巻で光源氏が明石君の住む大堰邸で食事する場面を手がかりに、源氏と明石君の複雑な関係を考察している。『枕草

子』で「恋人の家で食事をするのは興ざめだ」と記されるように、高貴な人物は外出先で食事すべきではないとする同時代の用例もある。それにもかかわらず、源氏は「うちとく」行為として、明石君のもとで食事していることから、源氏の「うちとく」行為がもたらした明石君との心情のずれを解き明かしていく。

続く第二章では、「真木柱」巻で光源氏が玉鬘に「かりのこ」を贈る一場面を取り上げ、二人の関係を考察している。語義を確認した上で、「かりのこ」が、玉鬘への想いをほのめかすのに適した事物であったことを指摘している。さらに、源氏の玉鬘に対する想いを示しながらも、この場面が両者の仲を完全に終わらせる重大な契機となったことを指摘している。

第三章では、物語中の和歌で多用される「塩」が、光源氏の須磨・明石での暮らしを想起させ、源氏が遠く離れた女君と通じ合うために用いられていることを考察している。須磨は伝統的な製塩の地である。源氏は言葉を通じて塩の仮想世界を作り、和歌で遠路を結ぶのである。また、明石一族にとって塩を詠んだ和歌は一族の結束を強めるものともなること、火葬の煙を塩焼きの煙に見立てる用例は、源氏の須磨退去を想起させながらも、現世と死後の隔絶した世界を繋ぐ役割をも果たしていることを考察している。

第四章では、「東屋」巻末における、弁尼から薫にくだものがさし出される場面の意義について考察している。弁尼は薫の意を酌んで亡き大君の形代となる浮舟との間を仲立ちするものの、薫の浮舟への執着を牽制し、大君追慕の情を惹起させていること、この場面が大君追慕の物語から浮舟を中心とした物語へと転換の契機となったことを指摘している。また、「薫がくだものを急いで食べたがっているように見えた」という解釈の背景の一つに、薫の秘めた女君への執着を「食」が暗示していることの可能性を指摘している。

「結章」は、『源氏物語』における「食」の取捨選択」と題して、「胡蝶」巻の中宮御読経の注釈として、『河海抄』に、『源氏物語』では描かれぬ「引茶」が挙げられていることを端緒に、物語で「茶」が描かれなかったことの意味を問い直している。中宮御読経は、前日の紫上の舟楽とは対照的に、殿上人が集まる公の行事である。「茶」を描かず、他の描写も簡素に済ませることで、源氏の栄華を公的な立場から示していると考えられること、「食」描写の取捨選択という考察の着眼点は、『源氏物語』本文だけでなく、各時代の受容例を網羅的に踏まえることで重層的な考察が可能になることを指摘している。

以上、多様な「食」の描写を取り上げ、「食」が登場人物の心情に影響を与え、人間関係を複雑化し、物語を進展させる鍵となることを検証している。物語において視線とも結びつく「食」が、『源氏物語』の読解に新たな視座を与えることを立証した論考でもある。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、人間の根源的な営みでありながら、物語文学においては直接的な論述が避けられる傾向にあった「食」を糸口に、『源氏物語』を考究した意欲的な成果である。

第一部では、「食」に関する記述と、それを見つめる登場人物のまなざしや感情が、物語

展開の鍵となっていることを、また第二部では、先行研究でも繰り返し論じられてきた『源氏物語』の本文理解を、「食」に関する記述を中心に再検討することで、新たな解釈が可能になることを提起している。第一部は主に作中人物論、第二部は解釈論というように、「食」の記述をめぐって、多面的な考察が試みられていることも高く評価できる。更に『源氏物語』全篇を考察対象としており、新たな読解の視点を提示した本論文の研究史上の功績は小さくないと評価できる。

各章の論考については、特に第一部第一章・第四章および第二部第一章・第二章・第三章の完成度が高いと考えられる。いずれの考察も、語句の用例を徹底的に検討する基本的な方法論を用いつつ、論の構成が工夫されており、しかも意外性のある結論が導き出されているのである。

第一部第一章は「不義」というキーワードが共通する藤壺と柏木との食に関わる意外な接点を考察しつつ、単純なモチーフの繰り返しのみに留まらない物語展開の周到さを丁寧に分析している。また、第四章では、位置付けや評価が難しいとされてきた中君研究の新たな視座を提起するだけでなく、そこに浮舟物語の構想までも見出そうとする視点は説得力があり、大いに首肯されるものであった。

もちろん第二・三章も優れた考察である。あたかも合わせ鏡のように、女三宮と光源氏の心情を映し出すものとして「食」が鍵となる同一場面の描写を取り上げ、全く交わるどころがない二人の心情を丁寧に描き出していくのである。

一部と二部をつなぐ付章については、方法論の確かさを評価する一方、本論文には不要であるとの意見が各委員から示された。

第二部第一章では、源氏が明石の君の大堰邸で食事する「薄雲」巻の一場面を取り上げ、もてなされる源氏をめぐる三つの問題（「うちとく」の意味／「くだもの」「強飯」の性質／大堰邸での食事の意味）を提起している。ここでは「うちとけぬ」明石の君が、源氏とはかけ離れた思いを抱いていることを指摘し、その場面の背後に、登場人物間の深い心情や葛藤が隠されていることを検証している。問題意識と結論が明確に対応した論理展開であり、高く評価できるのである。「くだもの」「強飯」など論文に頻出する語句の定義も丁寧に、物語読解において、「食」に注目することの有用性を学界に提唱した意義も大きいと考えられる。

第二章では、「真木柱」巻における源氏が髭黒と結婚した玉鬘に「かりのこ」を贈る場面の意味を考察している。この場面の文章構造や、「かりのこ」の語義を検討し、先行研究で主として取り上げられてきた「かりのこ」が、じつは附属物にすぎず、慕情を秘めた「橘」にこそ源氏の真意が籠められていた、とする予想外の結論を導き出す手腕は称揚すべきであろう。

第三章「塩の歌に寄せる思い」では、歌語「塩」が製塩の地である須磨・明石の実景、歌語の連想による恋や人生の「辛さ」など、様々に形を変えつつも『源氏物語』に一貫して描かれ続けており、登場人物を生き生きと動かす要因となっていることを指摘している。

重要な指摘であろう。更に深読みすれば、歌語「塩」を用いることこそが光源氏須磨流謫の構想の源泉であった可能性も付度させる優れた考察であった。

第四章も「食」が作中人物の身分や教養、思惑を明確に顕在化させる手段となっていることを丁寧に考察したものであり、論文発表時から高く評価されていた論考である。

また特筆すべきは結章の描かれなかった「引茶」に関する考察であろう。ここでの考察は荻田氏の方法論の確かさを示す重要な緒論としての役割を果たしているのである。

「引茶」をはじめ、「食」は、晴儀とも関わりが深いため、故実として、『源氏物語』の古注釈で取り上げられる機会が多い。南北朝期成立の『河海抄』以来、江戸時代の諸注釈における「食」に注目することも本論を補う視点として有用であろう。また、数多く残されている「源氏絵」をはじめとする絵画表象における「食」の描かれ方にも注目すべきであるが、これについては既に荻田氏の考察の視野に入っており、土佐派の作例を端緒に江戸時代の独自の物語解釈を見出し得る仮説の考察に着手している旨の補足があった。

如上、多くの研究者によって繰り返し論じられてきた著名な場面であっても、「食」に注目することで新たな解釈を獲得する可能性があることを示した荻田氏の方法論は、『源氏物語』研究だけではなく、今後の物語研究の新たな可能性をひらく成果として高く評価できる。

以上の審査結果により、審査委員会は一致して、本論文は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2016年1月6日（水曜日）15時から17時まで、末川記念会館第二会議室で行われた。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表などの様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。